

音大2年生(オーボエ科)のころ、友人のベーシストが聴かせてくれたのが、山下洋輔トリオの「クレイ」というレコードだった。坂田明(サックス)、森山威男(ドラム)、山下洋輔(ピアノ)という3人が、いきなりの全力疾走で駆け巡る。これ以上速い、時間の中に情報量の過大な音楽は聴いた事が無く、すべてが自由な超高速即興、しかし流れと論理性と3人の驚異的な精密さでの相互反応による一体感、これがジャズという音楽に属することだけは明らかで、一瞬のスキどころか、呼吸も思考も不可能な、ただただ全身がそれを受け止めるために動き出してしまふのを抑えるのに必死だった。

これが自分の一生を変えてしまった山下洋輔トリオ初体験だった。そのあとはひたすらこの人の追っかけとなって狂乱して暮らした。音大4年のころ新星日響というオーケストラに入団したが、そこで「企画委員」を命ぜられた時、真っ先にしたことには「山下洋輔に交響曲を依頼する」ということであつた。ちょうど雑誌で山下さんが「次は何か作曲をした」と話しておられたのを目ざとく

黙って走れ

プロムナード

見つけていたからだだった。事務所あてに送った依頼の手紙には「まだ定期的に早いと思われますので」という丁寧なお断りの返事が来たが、話はコレで終わらなかつた。

のちにミュンヘンに留学したが、そこに山下洋輔トリオ+1がツアーでやってきたのだった。演奏後楽屋



に押し掛けて行き、是非ウチで冷やし中華を食べて下さい、と必死でお願いした。奇跡的に彼らの時間に余裕があり、憧れの山下トリオ+1は狭い自宅に来てくれた。このとき、「あの交響曲を依頼する手紙をくれたのはキミかい」という変なヤツがクラシック界にいるのだとみんな驚いていたのだ」と爆笑になり、以来、とんでもなく長く、いま数えてみたらなんと35年間、公私にわたりお付き合いを頂いているのである。21世紀には実際に山下さんは交響曲を書き、その初演も指揮させて頂く事になった。全く、夢のようなことで、ファンの冥利につきるとはこのことだろう。

茂木 大輔

その山下さんはとても多くの素晴らしい著書を書かれているが、自分にとってもっとも印象的な一文は「風雲摩天楼秘帖」という、ニューヨークでの演奏生活にまつわるエッセーを集めた本の最後にある。

山下さんはヨーロッパで先に成功し、ジャズの本場とされるニューヨークにはあとから行ったそうだが、本場でのデビューにはかなりのプレッシャーを感じていたという。その仕事に成功裏にすべて終わった朝、山下さんはセントラル・パークを走ってみた。走りながら、このニューヨークを舞台に活躍した過去の偉大なジャズ・ミュージシャンたちが一緒に走っている幻想を見る。一緒に走りながら、「もう少し、早くここに来る事ができていたら…」と思う自分に、「それを言っただけで黙って走れ」と、戒める。

もっと早くこのニューヨークでデビューできていたら…と、かすかな後悔と手遅れの気持ちを持ちながら、「黙って走れ、先に進め」と自分に言い聞かせる言葉は胸を打つ。

山下さんのそんなニューヨークの朝を、自分も幾度かは味わっているようで、まだ全然そこまで行っていない気がする。おれも、黙って走ろう、と思う。

(NHK交響楽団首席オーボエ奏者)